番外編

# ふるさと御所 文化財探訪

## 石光山古墳群〈1〉

文化財課
☎60-1608

平成20年5月号から平成24年11月号まで「ふるさと御所　文化財探訪－考古学・古代史編－」をお届けしてきました。本来はその中に組み込みたかったものの、諸般の事情から詳細を記すのを控えたものも少なからずあります。このたび各種条件が整ったことにより、大字元町に所在する石光山古墳群のことについて、今号と次号の2回に分けてご紹介したいと思います。

写真1　石光山古墳群全景
（北西から：手前半分を発掘調査中）
（転載許可：奈良県立橿原考古学研究所）

石光山古墳群は東西300m、南北200mの独立丘陵を利用して営まれた約100基からなる群集墳（**写真1**）です。1972年（昭和47）～1974年（昭和49）にかけて、住宅開発に先立ち、当時、橿原考古学研究所におられた白石太一郎さんを調査主任として発掘調査が実施され、丘陵西半のおよそ半数の古墳が記録保存（調査後消滅）となりました。そして早くも2年後の1976年（昭和51）には、当時としては画期的ともいえる詳細な内容の発掘調査報告書が刊行されています（**写真2**）。群集墳研究にあたって必携の書ともいわれる同書にしたがって、この特色ある群集墳について述べていくことにします。

写真2　発掘調査報告書

最大の特徴は、独立丘陵上に所狭しと、それぞれの墳丘の裾を接するようにして、多くの古墳が築造されている（**図1**）ことで、まさに典型的な群集墳といえることです。発掘調査された丘陵西半の状況からその群形成のありかたをみると、5世紀後葉に3基の前方後円墳と9基の円墳が築造されたことを端緒とし、6世紀のうちに多くの円墳が築造されて、その後、細々とですが7世紀中葉過ぎまで古墳が造られ続けています。

図1　石光山古墳群

5世紀後葉築造の石光山8号墳は墳長35mとはいえ群中最大の前方後円墳で、墳丘裾には円筒埴輪列を伴っています。後円部の中心主体は竪穴式石室ですが、残念ながら乱掘され、副葬品はほとんど残っていませんでした。しかし、その脇にある副次的埋葬施設の木棺直葬主体部棺外からは、馬の腰から尻にかけてを飾り付けるための、金銅装剣菱形杏葉3点（**写真3**）と金銅装帯飾金具などにより構成される、煌びやかな尻繋装具（**図2**）が出土しています。

写真3　石光山8号墳　剣菱形杏葉
（転載許可：奈良県立
橿原考古学研究所附属博物館）

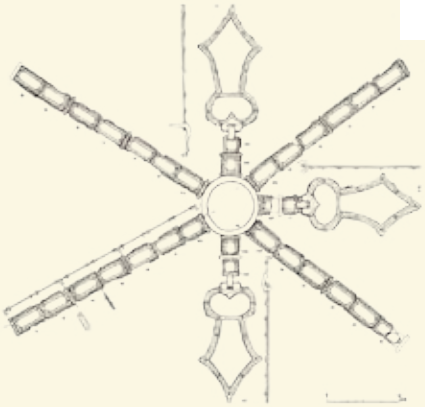

図2　石光山8号墳　馬の尻繋装具

**【参考文献】**

奈良県立橿原考古学研究所『葛城・石光山古墳群』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第31冊、1976年

（文責　藤田 和尊）